

病院 心臓病に強い 探訪

虚血性心疾患

近年、急性心筋梗塞や狭心症などの虚血性心疾患の治療では、血管に細い管（カテーテル）を入れて、先端の医療機器で治療を行う「冠動脈インターベンション（PCI）」治療が普及している。心臓の冠動脈という血管に生じた狭窄（きょうよう）や閉塞（へいさく）（へいそく）部をバルーンで拡張したり（風船療法）、薬剤のついた



筒状のステント（薬剤溶出性ステント）を留置して、血流を良好にする治療法だ。最近では冠動脈CT（CT/カテー）ター画像診断）検査の進歩も、その診断に大きく貢献している。

ただし、どのような病変に治療が必要か、見極めは重要になる。そんなPCIの最先端の治療を行っているのが、東京慈恵会医科大学附属病院循環器内科だ。

「PCIにおける薬剤溶出性ステントなどのデバイス（機器）は、新たなものが増え、10年単位で推移しています。年々患者さんが増加する中で、適用を含めた適正な診断と治療は、以前にも増して必要不可欠になってきているのです。」

東京慈恵会医科大学附属病院 循環器内科

進化するPCI治療 病変に応じた見極め重要

「虚血性心疾患では、動脈硬化のある人に病気を起こさせないことが重要ですが（一次予防）、PCI治療をされた方も、新たに病気が再発する

可能性があります。それを防ぐには、再発させないための厳格な生活習慣の管理（二次予防）にも力を入れています。」

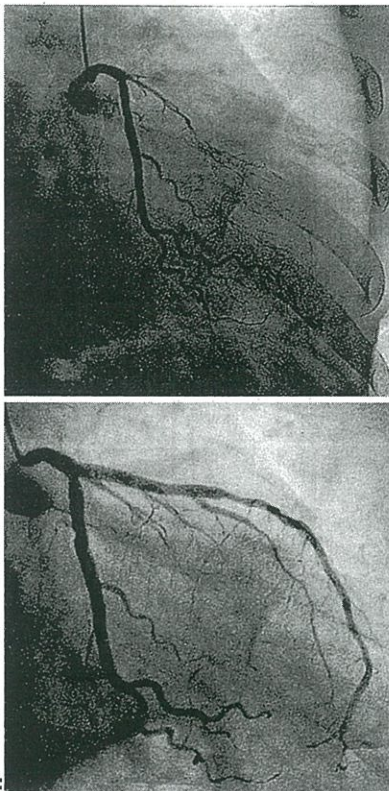
動脈硬化を促進させるのは生活習慣だ。しかし、現在の欧米化した生活スタイルで動脈硬化が進んでいても、自覚症状が乏しく、改善するのは容易なことではない。最新の医療機器で動脈硬化を評価し

「今後、ステント自体が溶けて消える生体吸収性ステントが登場する見込みです。デバイスが進化の中で、やはり、小川准教授は重視している。」

「この話す同科の小川崇之准教授（50）顔写真▶は、PCI治療のエキスパートであり、治療の難しい慢性完全閉塞という冠動脈疾患のPCIも得意としている。」

「ながら、個々の患者に合った生活指導や薬による治療も、小川准教授は重視している。」

「今後、ステント自体が溶けて消える生体吸収性ステントが登場する見込みです。デバイスが進化の中で、やはり、小川准教授は重視している。」



完全閉塞した血流を再開

東京慈恵会医科大学附属病院循環器内科の小川崇之准教授は、複雑な冠動脈病変の治療にも熱心に取り組んでいる。中でも、慢性完全閉塞の治療は難易度が高い。完全に閉塞した冠動脈を治療するために、さまざまなテクニックを駆使し、複雑なカテー

ル治療を行わなければならないからだ。小川准教授は、熟練技で閉塞した血管の血流を再開している。日々治療を進化させることで、新たな医療機器も適正に使いこなす。今後のさらなる展開に期待したい。

